

中期目標の達成状況報告書

令和 8 年 6 月

国立大学法人
室蘭工業大学

・大学の概要

(1) 現況

① 大学名

国立大学法人室蘭工業大学

② 所在地

北海道室蘭市水元町 27 番 1 号

③ 役員の状況

学長名：空閑 良壽（平成 27 年 4 月 1 日～令和 6 年 3 月 31 日）

松田 瑞史（令和 6 年 4 月 1 日～令和 12 年 3 月 31 日）

理事数：3 名

監事数：2 名（常勤 1 名、非常勤 1 名）

④ 学部等の構成

学 部	理工学部
研究科	工学研究科

⑤ 学生数及び教職員数

学生数	学部	2,749 名（うち留学生 74 名）
	大学院博士前期課程	480 名（うち留学生 27 名）
	大学院博士後期課程	78 名（うち留学生 45 名）
教員数（本務者）		180 名
職員数（本務者）		154 名

(2) 大学の基本的な目標等

室蘭工業大学の基本理念は、「創造的な科学技術で夢をかたちに」を実現すべく、総合的な理工学教育を行い、未来をひらく科学技術者を育てるとともに、人間・社会・自然との調和を考えた創造的な科学技術研究を展開し、地域社会さらには国際社会における知の拠点として豊かで持続可能な社会の発展に貢献することにある。本学はこの基本理念の実現に向けて、

「確かな研究力をベースとした教育力」で、北海道を「世界水準の価値創造の場」へと導く大学を目指す。

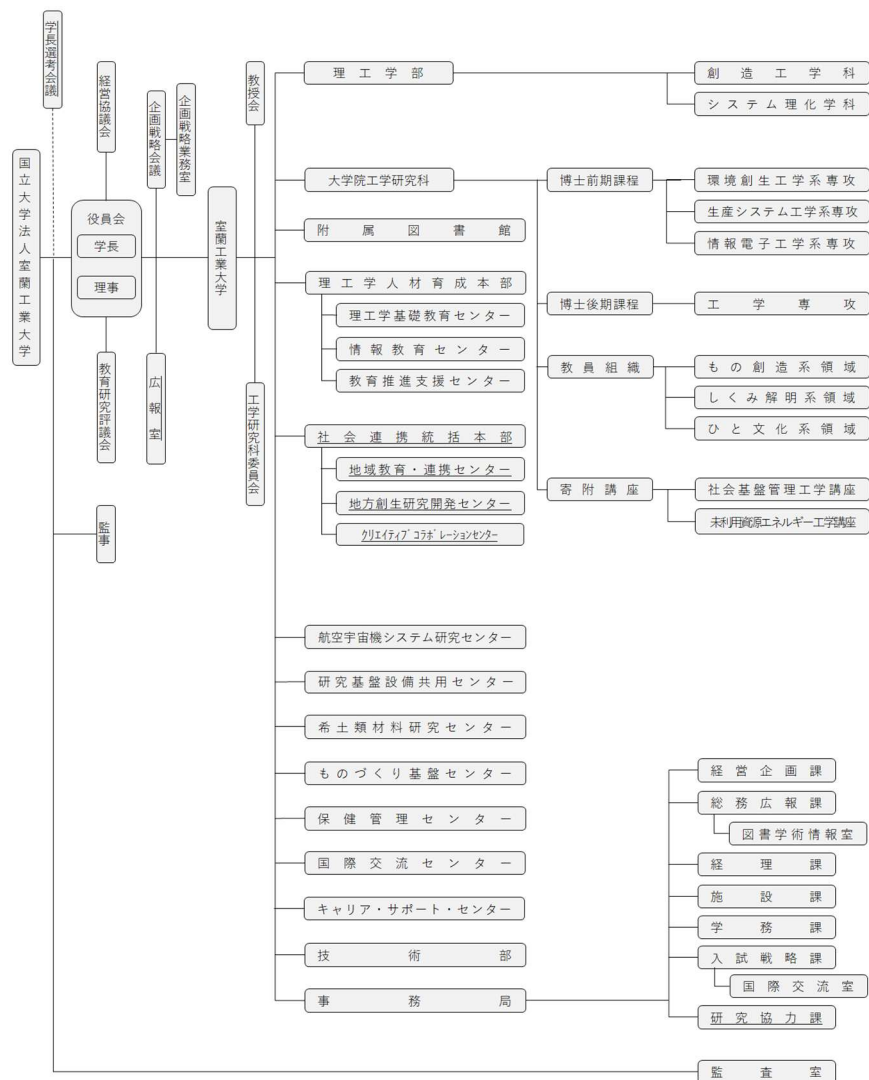
本学は、2019 年 4 月、工学部から理工学部へと大きく進化した。学士課程では、ものごとの本質をつかみ、探究心を養うべく理工学教育を全学的に充実させ、さらに Society 5.0 に対応する ICT や AI の本質を理解して使いこなし、北海道の世界水準のものづくり・価値づくりに貢献できる科学技術者を育てる。大学院博士前期課程では、専門と情報技術知識の深化・融合と課題解決能力の涵養を重点とした教育を行い、高度な科学技術者を育成する。大学院博士後期課程においては、多様な社会ニーズを踏まえ産業界等でも活躍できる国際性豊かな「イノベーション博士人材」育成の役割を果たす。これらを通して、地域社会にそして世界に貢献できる理工系人材の育成を第一の使命とする。

第二の使命は、確かな研究力をもって科学技術の知の創造をめざし、関連する学術研究を推進することである。本学は「夢」を描き「かたち」にする北海道 MONO づくりビジョン 2060 を策定し、北海道を世界水準の価値創造空間とするための目標を示し、その実現に向けスタートした。航空宇宙機システム、希土類材料、コンピュータ科学に関する研究をはじめとして、本学の特色、強みを活かしたものづくり産業や理工学の諸分野での世界水準の学術研究を推進し、国内外の大学等の研究者との連携・協働により、研究を発展させていく。

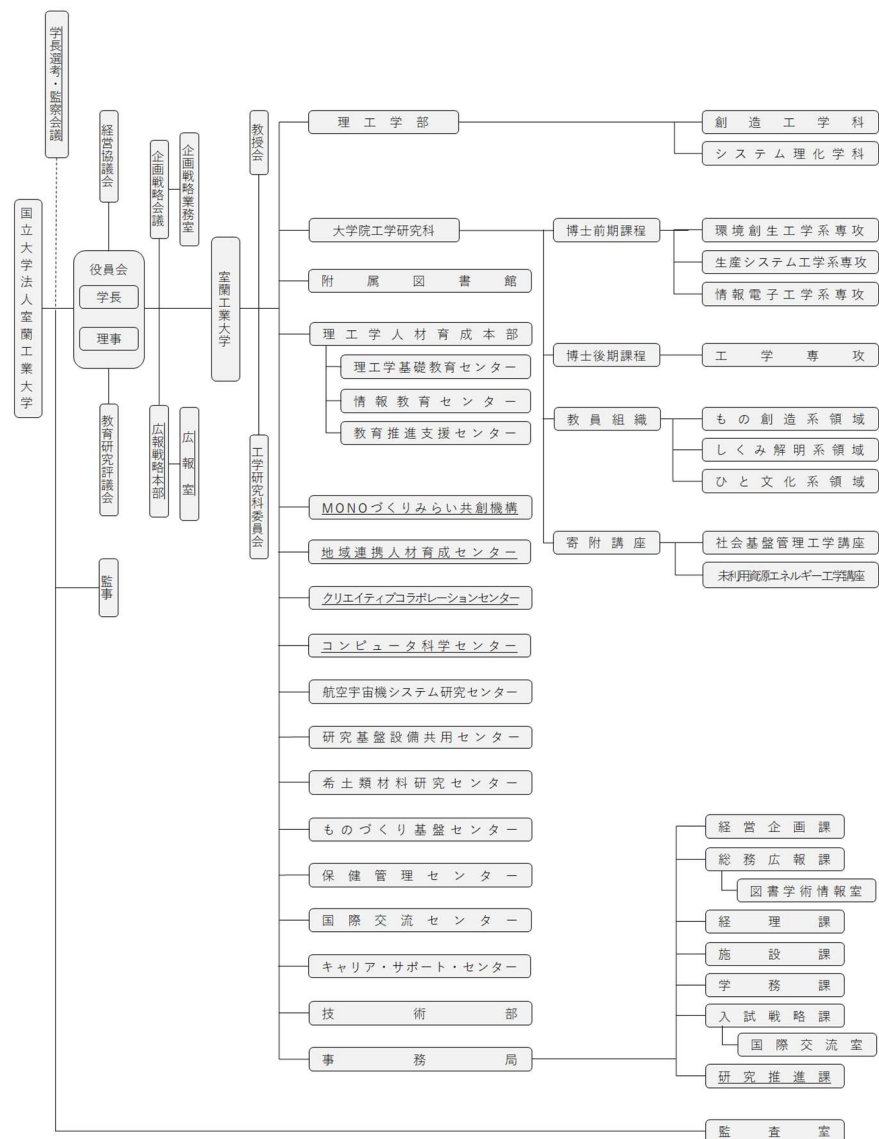
第三の使命は、確かな研究力をベースとして、地域社会との共創を実現して行くことである。多分野にわたる教育と研究に関する産学官金の連携を進展させ、地域の価値づくりに貢献できる理工系人材の育成と輩出そして課題解決のための知の拠点となる。さらに、地域の社会人・学び直し教育や小・中・高校生の啓発的・実践的理科教育にも貢献することにより、教育と研究の両輪により北海道地域の中核的拠点として、地域の持続可能な活性化を促進し、北海道を世界水準の価値創造の場に導く。

(3) 大学の機構図

令和3年度
機構図



令和7年度
機構図



・ 全体的な状況

本学は、第4期中期目標期間において、「確かな研究力をベースとした教育力」により、北海道を「世界水準の価値創造の場」へと導く大学を目指し、エビデンスに基づく柔軟で迅速な改革を進めてきた。令和6年4月には、大学を取り巻く環境の変化に対応するため、「真なる探究心から未来の価値づくりを。」をスローガンとする「松田ビジョン」を策定し、教育・研究・共創の3つのミッションを再整理した。同ビジョンの下、地域に貢献できる「専門×情報」人材の育成、航空宇宙機、希土類材料、コンピュータ科学等の強みを活かした世界水準の研究力の強化、北海道のカーボンニュートラル及びMONOづくり・価値づくりへの貢献を一体的に推進し、北海道・室蘭の地にある国立工業大学として、北海道、日本及び世界の安定的・持続的な発展に貢献する取組を進めている。

本学のこれまでの主な取組や成果について、以下のとおり示す。

I 教育研究の質の向上に関する事項

1 社会との共創

- 令和5年4月にMONOづくりみらい共創機構を設置し、企業・自治体との課題共有や研究テーマ創出から社会実装までを見据えた連携を推進した。その結果、企業等からの投資実績は、第3期中期目標期間平均122,783千円から、令和4～7年度平均234,629千円へと約1.9倍に増加した。
- 教育研究における「情報」×「専門」の強化を全学的に推進するとともに、クリエイティブコラボレーションセンターとMONOづくりみらい共創機構の連携により、研究シーズの社会実装に向けた伴走支援体制を構築した。これらの取組が評価され、令和7年度に地域オープンイノベーション拠点として選拔された。

2 教育

- 本学の数理データサイエンス教育プログラムが、令和6年度に文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（応用基礎レベル）」として認定され、令和7年度は72名が修了した。
- 大学院博士前期課程において、データサイエンス、AI、コンピュータ科学等の高度な情報分野の知識と、学部で培った理工学専門分野を融合し、社会課

題の解決に資する高度情報専門人材を育成するため、令和6年度に情報電子工学系専攻に共創情報学コースを新設した。

- 大学院博士後期課程では、学生と産業界が交流する本学独自のイベント「ドクコン」をはじめとした取組等により、博士後期課程学生の民間企業就職割合が第3期平均24.1%から令和4～7年度平均43.9%へ増加した。

3 研究

- コンピュータ科学分野の世界水準の研究推進と高度情報専門人材育成を目的に、令和5年4月にコンピュータ科学センターを設置した。国際ワークショップの継続開催等により国内外との連携を強化した結果、センター所属教員のTOP10%論文率は令和5～7年度平均で73.1%となった。

4 その他社会との共創、教育、研究に関する重要事項

- 本学の強みである航空宇宙分野の発展に向け、航空宇宙機システム研究センターへ予算を重点配分し、白老実験場での大規模実験や宇宙プロジェクト共創ラボトリを活用した共同研究を推進した。その結果、同センターの外部資金獲得件数は令和4年度33件から令和7年度38件へ増加し、さらに3件の宇宙戦略基金事業に連携機関として参画するに至った。

II 業務運営の改善及び効率化に関する事項

- 第4期中期目標期間に係る業務の実績に関する報告書（以下「業務実績報告書」という。）p.4からp.10を参照。

III 財務内容の改善に関する事項

- 業務実績報告書p.11からp.12を参照。

IV 教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する事項

- 業務実績報告書p.13からp.15を参照。

V その他業務運営に関する重要事項

- 業務実績報告書p.16からp.19を参照。

○ 各中期目標の達成状況

I 教育研究の質の向上に関する事項

中期目標	1 社会との共創 【1】人材養成機能や研究成果を活用して、地域の産業（農林水産業、製造業、サービス産業等）の生産性向上や雇用の創出、文化の発展を牽引し、地域の課題解決のために、地方自治体や地域の産業界をリードする。①
------	--

中期計画	中期計画の実施状況等
【1-1】 本学が第3期中期目標期間において策定した「北海道 MONO づくりビジョン 2060」を基礎とし、地域創生への貢献、イノベーションの創出、エコシステムを利用した教育の実現のために、本学が中核となる大学・地方自治体・企業からなる地域創生総合化エコシステムを構築・活用し、社会からの投資を呼び込む。 ○評価指標 【1-1-①】連携対象企業・自治体からの投資実績（共同研究、受託研究、学術指導）を第3期中期目標期間終了時比 10%増加させる	《中期計画の実施状況》 ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ ○地域創生総合化エコシステムの構築・活用 - 北海道白糠町及び民間企業等と連携し、令和4年10月に科学技術振興機構（JST）「共創の場形成支援プログラム（COI-NEXT）」に採択され、「アシル-トイタによる心と体に響く新しい食の価値共創拠点」を開始した。本事業では、アイヌ文化に根差した地域拠点ビジョンの構築を起点に、<u>産学官が継続的に参画する共創体制を整備するとともに、「食物語」という新たな価値概念の整理、高付加価値食材候補の探索、評価技術の開発等を進め、特許出願に至る成果を挙げている。</u>これらの取組は、研究成果の創出にとどまらず、地域住民・高校生・学生の参画を通じた人材育成や社会的価値の可視化にもつながっている。 - 北海道三笠市における、LCA 木質バイオマス燃焼灰を CO2 固定材とする取組みに際し、チャレンジフィールド北海道（経済産業省「産学融合拠点創出事業（J-NEXUS）採択事業」）における補助金への同市の申請及び伴走を支援した結果、採択され、本学と同市との委託研究につながっている。また、スタートアップ創業に関する取り組みとして、本学教員の GAP ファンドへの応募を支援し、令和7年度に、公益財団法人北海道科学技術総合振興センター（ノーステック財団）による GAP ファンド2件の採択に繋がった。 ○地方自治体・企業からの連携・投資状況 - 北海道美瑛町からの委託研究により、地球温暖化対策実行計画（区域施策編）の原案策定に取組み、当該計画を基に同町が申請した結果、同町の計画が環境省「重点対策加速化事業」に採択された。また、組織対組

織の包括連携協定を締結している企業とは定期的に連携推進協議会を開催し、第 3 期中期目標期間中の共同研究 34 件の継続分を含め、第 4 期中期目標期間は 43 件の共同研究に取り組んでいる。これらをはじめとした取組により、連携対象企業・自治体からの投資実績の第 4 期中期目標期間（4 年目終了時）の平均は 234,629 千円となり、目標値 135,061 千円に対して、1.7 倍と大きく上回った。

【評価指標の達成状況】

1) 定量的な評価指標

・評価指標の達成状況 【4 年目終了時】 iii

No.	基準値	実績				見込み		目標値
	第 3 期終了時 (第 3 期の平均値)	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	第 4 期中期目標 期間中の平均
1-1-①	-	81	58	74	91	91	91	10%増加
	122,783 千円	222,047	194,086	213,680	234,629	234,629	234,629	135,061 千円

<補足>

- ・ R8 及び R9 の見込みは、R4 から R7 の平均値とした。

中期計画	中期計画の実施状況等																																																		
【1-2】地域の課題解決のために、データサイエンス等の情報技術やものづくり技術を基盤として、魅力的な地域企業の増加に向けた地方自治体・産業界との連携を通して、地域の産業振興に寄与できる人材を輩出する取組を実施する。 ○評価指標 【1-2-①】数理・データサイエンスプログラム関連科目を整備し、応用基礎レベル※¹相当まで充実させる 【1-2-②】地域志向人材育成プログラム修了者数を第3期中期目標期間終了時比1.5倍に増加させる ※¹ 「応用基礎レベル」：文部科学省による「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」における応用基礎レベル（数理・データサイエンス・AIの知識を、様々な専門分野へ応用・活用することができる能力）を指している。	《中期計画の実施状況》 ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ ○地域の産業振興に寄与できる人材を輩出する取り組みの実施 - 地域の産業振興に寄与できる人材を輩出する取組である「地域志向人材育成プログラム」を構成する授業科目を見直して履修しやすい環境整備を行った結果、令和4年度から令和7年度の4年間におけるプログラム修了者数の平均は512名となり、令和8年度から令和9年度も同程度のプログラム修了者数が見込まれることから、目標値153名を大きく上回ることが見込まれる。 【評価指標の達成状況】 1）定量的な評価指標 ・評価指標の達成状況 <table><tr><th colspan="10">【4年目終了時】 iii</th></tr><tr><th rowspan="2">No.</th><th>基準値</th><th colspan="4">実績</th><th colspan="2">見込み</th><th>目標値</th></tr><tr><th>第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)</th><th>R4年度</th><th>R5年度</th><th>R6年度</th><th>R7年度</th><th>R8年度</th><th>R9年度</th><th>第4期中期目標 期間中の平均</th></tr><tr><td rowspan="2">1-2-②</td><td>-</td><td>4.7</td><td>5.0</td><td>5.0</td><td>5.0</td><td>5.0</td><td>5.0</td><td>1.5倍増加</td></tr><tr><td>102名</td><td>475</td><td>505</td><td>508</td><td>512</td><td>512</td><td>512</td><td>153名</td></tr></table> ＜補足＞ - R8～9年度の見込みは、R4～7年度の平均値とした。 2）定性的な評価指標 ・評価指標の達成状況 <table><tr><th colspan="2">【4年目終了時】 ii</th></tr><tr><th>No.</th><th>進捗等</th></tr><tr><td>1-2-①</td><td>＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ - 令和6年度に学部の1年次～3年次の必修又は選択科目（学部共通科目、学 </td></tr></table>	【4年目終了時】 iii										No.	基準値	実績				見込み		目標値	第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	第4期中期目標 期間中の平均	1-2-②	-	4.7	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	1.5倍増加	102名	475	505	508	512	512	512	153名	【4年目終了時】 ii		No.	進捗等	1-2-①	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 令和6年度に学部の1年次～3年次の必修又は選択科目（学部共通科目、学
【4年目終了時】 iii																																																			
No.	基準値	実績				見込み		目標値																																											
	第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	第4期中期目標 期間中の平均																																											
1-2-②	-	4.7	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	1.5倍増加																																											
	102名	475	505	508	512	512	512	153名																																											
【4年目終了時】 ii																																																			
No.	進捗等																																																		
1-2-①	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 令和6年度に学部の1年次～3年次の必修又は選択科目（学部共通科目、学																																																		

	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="813 151 1144 496"></td><td data-bbox="1144 151 2166 496"> 科共通科目、数理情報システムコース科目)により構成したプログラムを「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム (応用基礎レベル)」へ申請し、認定された。令和7年度は72名が同プログラムを修了している。さらに、令和7年度には、同年度以降の学部入学者から全員が同プログラムを修了できるよう、各授業科目の内容を見直し、応用基礎レベルに係る授業科目の変更申請を行い、受理されている。令和8～9年度においてもリテラシーレベル及び応用基礎レベルを継続して実施する予定である。 </td></tr> <tr> <td data-bbox="813 496 1144 786"></td><td data-bbox="1144 496 2166 786"></td></tr> </table>		科共通科目、数理情報システムコース科目)により構成したプログラムを「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム (応用基礎レベル)」へ申請し、認定された。令和7年度は72名が同プログラムを修了している。さらに、令和7年度には、同年度以降の学部入学者から全員が同プログラムを修了できるよう、各授業科目の内容を見直し、応用基礎レベルに係る授業科目の変更申請を行い、受理されている。令和8～9年度においてもリテラシーレベル及び応用基礎レベルを継続して実施する予定である。		
	科共通科目、数理情報システムコース科目)により構成したプログラムを「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム (応用基礎レベル)」へ申請し、認定された。令和7年度は72名が同プログラムを修了している。さらに、令和7年度には、同年度以降の学部入学者から全員が同プログラムを修了できるよう、各授業科目の内容を見直し、応用基礎レベルに係る授業科目の変更申請を行い、受理されている。令和8～9年度においてもリテラシーレベル及び応用基礎レベルを継続して実施する予定である。				

中期目標	2 教育 【2】学生の能力が社会でどのように評価されているのか、調査、分析、検証をした上で、教育課程、入学者選抜の改善に繋げる。特に入学者選抜に関しては、学生に求める意欲・能力を明確にした上で、高等学校等で育成した能力を多面的・総合的に評価する。⑤
-------------	--

中期計画	中期計画の実施状況等				
【2-1】学士課程における学修成果評価方針（アセスメントポリシー）を点検・見直すとともに、そのアセスメントポリシーに基づき、学士課程における学修成果を社会からの評価結果も含め多面的に評価し、評価結果が学生および社会から見えるように可視化する。また、学士課程教育の改善のため、得られた評価結果を大学のファカルティ・ディベロップメント (FD) 活動へ反映させる。 ○評価指標 【2-1-①】学内及び社会への各種アンケート結果において社会からの肯定的な結果が得られていること 【2-1-②】カリキュラムポリシーとディプロマポリシーに対するアセスメントポリシーの整備及び継続的な検証 【2-1-③】学修成果評価結果の可視化及びその FD 活動への継続的な反映	《中期計画の実施状況》 <令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み> 【評価指標の達成状況】 1) 定性的な評価指標 ・評価指標の達成状況 <u>【4年目終了時】 ii</u> <table border="1" data-bbox="840 699 2110 1385"> <thead> <tr> <th data-bbox="840 699 1160 753">No.</th><th data-bbox="1160 699 2110 753">進捗等</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="840 753 1160 1385">2-1-①</td><td data-bbox="1160 753 2110 1385"> <令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み> 令和6年度に企業アンケート及び卒業生アンケート（3年毎に実施）を実施し、結果を公表した。企業アンケートでは、「基礎科学及び工学に関する専門知識を身につけている卒業生が多い」、「論理的な思考の展開ができ、それを他者への確に伝えることができる卒業生が多い」、「問題解決にあたり、調査、分析、報告の能力が高い卒業生が多い」、「幅広い教養を身につけている卒業生が多い」、「社会的な常識を持ち、健全な人間関係を築くことができる卒業生が多い」の設問で90%以上の肯定的な回答を得た。また、卒業生アンケートでは、「体系的に身に付けた専門性」「課題を発見し、実現可能な解を見出し、社会に活かす能力」「理工学の基礎知識と複数の専門における基盤的な学問の基礎知識」の設問で70%以上の肯定的な回答を得た（別添資料 p.1）。今後は、令和9年度に卒業生アンケート及び企業アンケートを実施し、結果を分析する予定である。 </td></tr> </tbody> </table>	No.	進捗等	2-1-①	<令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み> 令和6年度に企業アンケート及び卒業生アンケート（3年毎に実施）を実施し、結果を公表した。企業アンケートでは、「基礎科学及び工学に関する専門知識を身につけている卒業生が多い」、「論理的な思考の展開ができ、それを他者への確に伝えることができる卒業生が多い」、「問題解決にあたり、調査、分析、報告の能力が高い卒業生が多い」、「幅広い教養を身につけている卒業生が多い」、「社会的な常識を持ち、健全な人間関係を築くことができる卒業生が多い」の設問で90%以上の肯定的な回答を得た。また、卒業生アンケートでは、「体系的に身に付けた専門性」「課題を発見し、実現可能な解を見出し、社会に活かす能力」「理工学の基礎知識と複数の専門における基盤的な学問の基礎知識」の設問で70%以上の肯定的な回答を得た（別添資料 p.1）。今後は、令和9年度に卒業生アンケート及び企業アンケートを実施し、結果を分析する予定である。
No.	進捗等				
2-1-①	<令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み> 令和6年度に企業アンケート及び卒業生アンケート（3年毎に実施）を実施し、結果を公表した。企業アンケートでは、「基礎科学及び工学に関する専門知識を身につけている卒業生が多い」、「論理的な思考の展開ができ、それを他者への確に伝えることができる卒業生が多い」、「問題解決にあたり、調査、分析、報告の能力が高い卒業生が多い」、「幅広い教養を身につけている卒業生が多い」、「社会的な常識を持ち、健全な人間関係を築くことができる卒業生が多い」の設問で90%以上の肯定的な回答を得た。また、卒業生アンケートでは、「体系的に身に付けた専門性」「課題を発見し、実現可能な解を見出し、社会に活かす能力」「理工学の基礎知識と複数の専門における基盤的な学問の基礎知識」の設問で70%以上の肯定的な回答を得た（別添資料 p.1）。今後は、令和9年度に卒業生アンケート及び企業アンケートを実施し、結果を分析する予定である。				

	・評価指標の達成状況 <u>【4年目終了時】 ii</u>	
	No.	進捗等
	2-1-②	<令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み> 令和6年4月にカリキュラムポリシーとディプロマポリシーに対するアセスメントポリシーに相当する「アセスメントプラン」を制定した。令和7年度に、アセスメントプランに基づき、令和6年度までの状況を検証し、カリキュラムポリシーに基づく教育課程が編成されていること及びディプロマポリシーに掲げた能力を身に付けた人材を輩出していることを確認し、検証結果を大学ホームページで公表した。令和8年度以降もアセスメントプランに基づき継続的な検証を実施する。
	・評価指標の達成状況 <u>【4年目終了時】 ii</u>	
	No.	進捗等
	2-1-③	<令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み> 令和5年度以降の理工学部卒業者に対してディプロマサプリメントを発行し、ディプロマポリシーに示す能力別、所属するコースの学習目標別のGPAの状況を確認できるようにした。また、令和5年度に学務情報システムのカスタマイズを行い、学生自身がディプロマポリシーの達成度をリアルタイムかつ視覚的に認識できるようにした。さらに、令和7年度に実施したFDワークショップにおいて、アセスメントプランの一つである成績評価方法をテーマとして取り上げ、分野の異なる教員によるグループワークを実施した。令和8年度以降も理工学部卒業者に対してディプロマサプリメントを継続して発行するとともに、アセスメントプランに基づく検証結果の公表及びFD活動への反映を継続して実施する予定である。

中期計画	中期計画の実施状況等								
【2-2】継続的にアドミッションポリシー（AP）を検証し、必要に応じて見直す。特に、総合型選抜を中心に選抜方法を分析し、その結果を、選抜方法の改善に反映させる。 ○評価指標 【2-2-①】アセスメントポリシーに基づいた AP の整備及びその継続的な検証 【2-2-②】総合型選抜の継続的な分析及び分析に基づく選抜・評価方法の改善	《中期計画の実施状況》 ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 【評価指標の達成状況】 1) 定性的な評価指標 ・評価指標の達成状況 【4年目終了時】 ii <table border="1"> <thead> <tr> <th>No.</th><th>進捗等</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2-2-①</td><td> ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ - 令和5年度にアセスメントポリシーに相当する「アセスメントプラン」を策定し、令和6年度に同プランに基づき、令和5年度入試の試験結果等の分析を実施するとともに、令和6年度入学者を対象とした新入生アンケートを実施した。アンケートではアドミッションポリシーの認知度が8割を超えるなど、概ね高い水準が確認された（別添資料 p. 2）。令和8年度以降も、アセスメントポリシーに基づく分析および検証を継続的に実施し、入学者選抜および教育改善に活用していく予定である。 </td></tr> </tbody> </table> ・評価指標の達成状況 【4年目終了時】 ii <table border="1"> <thead> <tr> <th>No.</th><th>進捗等</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2-2-②</td><td> ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ - 総合型選抜に関する調査・分析結果を踏まえ、令和7年度入学者選抜（総合型選抜）において女子枠を創設するとともに、選抜方法および評価方法等を従来の方式から見直した。その結果、総合型選抜による女子入学者数は、令和6年度の19名（女子割合13.5%）から令和7年度には33名（同24.1%）へと約1.7倍に増加し、女子割合も10ポイント以上上昇するなど、顕著な改善が見られた。令和8年度においても29名（同20.3%）を確保し、一定 </td></tr> </tbody> </table>	No.	進捗等	2-2-①	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 令和5年度にアセスメントポリシーに相当する「アセスメントプラン」を策定し、令和6年度に同プランに基づき、令和5年度入試の試験結果等の分析を実施するとともに、令和6年度入学者を対象とした新入生アンケートを実施した。アンケートではアドミッションポリシーの認知度が8割を超えるなど、概ね高い水準が確認された（別添資料 p. 2）。令和8年度以降も、アセスメントポリシーに基づく分析および検証を継続的に実施し、入学者選抜および教育改善に活用していく予定である。	No.	進捗等	2-2-②	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 総合型選抜に関する調査・分析結果を踏まえ、令和7年度入学者選抜（総合型選抜）において女子枠を創設するとともに、選抜方法および評価方法等を従来の方式から見直した。その結果、総合型選抜による女子入学者数は、令和6年度の19名（女子割合13.5%）から令和7年度には33名（同24.1%）へと約1.7倍に増加し、女子割合も10ポイント以上上昇するなど、顕著な改善が見られた。令和8年度においても29名（同20.3%）を確保し、一定
No.	進捗等								
2-2-①	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 令和5年度にアセスメントポリシーに相当する「アセスメントプラン」を策定し、令和6年度に同プランに基づき、令和5年度入試の試験結果等の分析を実施するとともに、令和6年度入学者を対象とした新入生アンケートを実施した。アンケートではアドミッションポリシーの認知度が8割を超えるなど、概ね高い水準が確認された（別添資料 p. 2）。令和8年度以降も、アセスメントポリシーに基づく分析および検証を継続的に実施し、入学者選抜および教育改善に活用していく予定である。								
No.	進捗等								
2-2-②	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 総合型選抜に関する調査・分析結果を踏まえ、令和7年度入学者選抜（総合型選抜）において女子枠を創設するとともに、選抜方法および評価方法等を従来の方式から見直した。その結果、総合型選抜による女子入学者数は、令和6年度の19名（女子割合13.5%）から令和7年度には33名（同24.1%）へと約1.7倍に増加し、女子割合も10ポイント以上上昇するなど、顕著な改善が見られた。令和8年度においても29名（同20.3%）を確保し、一定								

		水準を維持している。令和 8 年度以降も、引き続き総合型選抜の分析・検証を行いながら、女子学生をはじめとした多様な志願者の確保に資する選抜・評価方法を改善する。

中期目標	2 教育 【3】特定の専攻分野を通じて課題を設定して探究するという基本的な思考の枠組みを身に付けさせるとともに、視野を広げるために他分野の知見にも触れることで、幅広い教養も身に付けた人材を養成する。(学士課程) ⑥
-------------	---

中期計画	中期計画の実施状況等								
【3-1】多様な選抜方法で入学してきた学生に対して、学修の範囲を自身の専攻分野だけではなく関連の深い隣接領域へ広げる際に重要となる低学年次の理数基礎科目について、学生の能力に応じて、その理解を補うカスタムメイド型学力向上支援システムを導入・運用する。 ○評価指標 【3-1-①】理数基礎科目の理解を補う教育を行うための制度としてのカスタムメイド型学力向上支援システムの導入 【3-1-②】システム利用学生の理数基礎科目の単位取得率を、第3期中期目標期間終了時と比べ増加傾向にする 【3-1-③】システム利用学生の学習時間を第3期中期目標期間終了時比10%増加させる	《中期計画の実施状況》								
	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞								
	【評価指標の達成状況】								
	1) 定量的な評価指標								
	・評価指標の達成状況				【4年目終了時】 ii				
	No.	基準値	実績				見込み		目標値
		第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	増加傾向
	3-1-②	78%	-	87	90	88	88	88	78%
	＜補足＞								
	・ カスタムメイド型学力向上支援システムは、R5年度に導入した。								
	・ R8～9年度の見込みは、R5～7年度の平均値とした。								
	・評価指標の達成状況				【4年目終了時】 ii				
	No.	基準値	実績				見込み		目標値
		第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	令和5～令和9 年度の平均
	3-1-③	-	-	13	11	10	10	10	10%増加
		15.82時間/週	-	17.93	17.52	17.45	17.40	17.40	17.40時間/週

<補足>

- ・ カスタムメイド型学力向上支援システムは、R5 年度に導入した。
- ・ R8～9 年度の見込みは、目標値とした。

2) 定性的な評価指標

・ 評価指標の達成状況 【4 年目終了時】 ii

No.	進捗等
3-1-①	<令和 4～7 年度の実績及び令和 8～9 年度の見込み> ・ カスタムメイド型学力向上支援システムとして、令和 5 年度に学習管理システム（LMS）上に「物理スタディーサポート室」のコースを開設し、学生の自己学習を促す仕組みを導入するとともに、専門分野が物理である定年退職教員をシニアプロフェッサーとして採用し、週 1 回の個別指導を行う体制を構築した。これに加え、令和 7 年度には、新たに「数学スタディーサポート室」のコースを開設するとともに、専門分野が数学であるシニアプロフェッサーによる個別指導体制を構築した。令和 8 年度以降も、「物理スタディーサポート室」及び「数学スタディーサポート室」のコース開設及びシニアプロフェッサーによる個別指導体制を継続して実施する予定である。

中期計画	中期計画の実施状況等								
【3-2】教養教育を含む理工学部共通教育、基礎的、実践的な情報教育、視野を広げるための幅広い学科共通教育、課題探求能力を身につけるためのコース専門教育それぞれにおける科目群について教育の状況を調査分析し、教育効果を検証するために自己評価を行うとともに外部評価を受ける。 ○評価指標 【3-2-①】各種アンケートを活用し、総合的な評価結果が肯定的な傾向であること 【3-2-②】自己評価・外部評価の計画的な実施	《中期計画の実施状況》 ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 【評価指標の達成状況】 1) 定性的な評価指標 ・評価指標の達成状況 <u>【4年目終了時】 ii</u> <table> <tr> <th>No.</th><th>進捗等</th></tr> <tr> <td>3-2-①</td><td> ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ - 毎年、学部卒業予定者を対象に実施している卒業予定者アンケートの結果を活用し、理工学部共通教育、学科共通教育、コース専門教育における学生の理解度を調査分析した結果、「よく理解できた」及び「理解できた」の回答割合は毎年80%程度で推移しており、肯定的な傾向が続いている（別添資料p.3）。令和8年度以降も、卒業予定者アンケートを実施し、教育の状況を調査分析する予定である。 </td></tr> </table> ・評価指標の達成状況 <u>【4年目終了時】 ii</u> <table> <tr> <th>No.</th><th>進捗等</th></tr> <tr> <td>3-2-②</td><td> ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ - 令和元年度に理工学部改組しており、学年進行が終了したことから、令和5年度に理工学部の自己評価を実施した。また、日本技術者教育認定機構（JABEE）による認定の継続審査について、令和4年度に機械ロボット工学コース及び建築土木工学コース土木工学トラック、令和6年度に電気電子工学コース及び化学生物システムコースが受審したほか、数理情報システムコースが、外部評価を受審した。今後は、令和9年度において、建築土木工学コース（建築学トラック及び土木工学トラック）並びに機械ロボット工学コ </td></tr> </table>	No.	進捗等	3-2-①	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 毎年、学部卒業予定者を対象に実施している卒業予定者アンケートの結果を活用し、理工学部共通教育、学科共通教育、コース専門教育における学生の理解度を調査分析した結果、「よく理解できた」及び「理解できた」の回答割合は毎年80%程度で推移しており、肯定的な傾向が続いている（別添資料p.3）。令和8年度以降も、卒業予定者アンケートを実施し、教育の状況を調査分析する予定である。	No.	進捗等	3-2-②	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 令和元年度に理工学部改組しており、学年進行が終了したことから、令和5年度に理工学部の自己評価を実施した。また、日本技術者教育認定機構（JABEE）による認定の継続審査について、令和4年度に機械ロボット工学コース及び建築土木工学コース土木工学トラック、令和6年度に電気電子工学コース及び化学生物システムコースが受審したほか、数理情報システムコースが、外部評価を受審した。今後は、令和9年度において、建築土木工学コース（建築学トラック及び土木工学トラック）並びに機械ロボット工学コ
No.	進捗等								
3-2-①	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 毎年、学部卒業予定者を対象に実施している卒業予定者アンケートの結果を活用し、理工学部共通教育、学科共通教育、コース専門教育における学生の理解度を調査分析した結果、「よく理解できた」及び「理解できた」の回答割合は毎年80%程度で推移しており、肯定的な傾向が続いている（別添資料p.3）。令和8年度以降も、卒業予定者アンケートを実施し、教育の状況を調査分析する予定である。								
No.	進捗等								
3-2-②	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 令和元年度に理工学部改組しており、学年進行が終了したことから、令和5年度に理工学部の自己評価を実施した。また、日本技術者教育認定機構（JABEE）による認定の継続審査について、令和4年度に機械ロボット工学コース及び建築土木工学コース土木工学トラック、令和6年度に電気電子工学コース及び化学生物システムコースが受審したほか、数理情報システムコースが、外部評価を受審した。今後は、令和9年度において、建築土木工学コース（建築学トラック及び土木工学トラック）並びに機械ロボット工学コ								

		ース及び物理物質システムコースが JABEE 認定の継続審査を受審予定である。また、同年度においては、航空宇宙工学コースが外部評価を受審予定である。

中期計画	中期計画の実施状況等								
【3-3】学部の早期から特定の研究分野に興味を持たせ、研究活動に着手できる「学士修士一貫教育プログラム」の取組を基盤とし、大学院進学希望学生に対して、大学院でスムーズに研究活動ができるように、学部の早期から研究マインドを育成する取組を実施する。 ○評価指標 【3-3-①】学部の早期から研究マインドが育成される取組の実施と継続的な検証 【3-3-②】大学院博士前期課程進学者を第3期中期目標期間終了時までと比べて増加させる	《中期計画の実施状況》								
	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞								
	【評価指標の達成状況】								
	1) 定量的な評価指標								
	・評価指標の達成状況				【4年目終了時】 ii				
	No.	基準値	実績				見込み		目標値
		第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	第4期中期目標 期間中の平均
	3-3-②	222名	264	255	251	246	246	246	222名超
	＜補足＞								
	・ R8～9年度の見込みは、R4～7年度の平均値とした。								
2) 定性的な評価指標									
・評価指標の達成状況				【4年目終了時】 ii					
No.	進捗等								
3-3-①	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ ・ 学部1・2年生を対象とした学士修士一貫教育プログラム説明会において、海外派遣制度を利用した学生、地域PBL参加学生と交流する場を設けた。また、同プログラム部門会議における検証を経て、同プログラムの対象に夜間主コース学生及び編入学生を加えることとした結果、令和6年度に編入学生2名がプログラム適用学生として認定された。本取組の他、学年や進路検討段階に応じた大学院進学説明会を複数回実施した。その結果、令和8年3月末までに延べ1,154名の学部生が参加した。令和5年度までの取組を検証し								

		た結果、令和 6 年度から現役大学院生によるパネル・トークショーを新たに実施し、実体験に基づく情報提供を行った。さらに、専門分野に対する理解を早期に形成することを目的として、学科のコース分属時期を見直し、従来の 2 年後期から 2 年前期へ早期化した。令和 8 年度以降も、取組を継続し、検証を行う予定である。

中期目標	2 教育 【4】研究者養成の第一段階として必要な研究能力を備えた人材を養成する。高度の専門的な職業を担う人材を育成する課程においては、産業界等の社会で必要とされる実践的な能力を備えた人材を養成する。(修士課程) ⑦
-------------	---

中期計画	中期計画の実施状況等																										
【4-1】理工学部改組との連続性を明確にし、大学院博士前期課程各専攻のコースを再編する。その際、大学院博士前期課程の教育課程を、研究能力の根底を支える系統的なコースワーク科目と具体的なテーマを設定した演習系科目で構成する。また、研究能力が、大学院博士前期課程の学生個人にどれだけ備わったかを可視化するために、新たに研究能力ポートフォリオ（仮称）を整備し、運用する。 ○評価指標 【4-1-①】令和5年度までに大学院博士前期課程のコースを再編し、その教育課程表、コース専門科目の系統図及び科目ナンバリング表を作成・公開する 【4-1-②】令和6年度までに大学院博士前期課程学生の研究能力ポートフォリオ（仮称）を整備する 【4-1-③】研究能力ポートフォリオ（仮称）への研究活動登録率を上昇させる	《中期計画の実施状況》 ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ ○ 高度情報専門人材育成に向けた共創情報学コースの新設 - 大学院博士前期課程において、<u>データサイエンス、AI、コンピュータ科学などの情報科学・工学における高度な専門知識を習得し、学部時代に培ってきた建築土木工学、機械ロボット工学、航空宇宙工学、電気電子工学、物理物質、化学生物、数理情報といった理工学専門分野を駆使して多様な社会課題を解決に導く高度情報専門人材を養成するため、令和6年度に情報電子工学系専攻に共創情報学コースを新設した。</u>同コースには、令和6年度 61 名、令和7年度 33 名が入学し、令和8年度には 38 名が入学予定となっている。 【評価指標の達成状況】 1) 定量的な評価指標 ・評価指標の達成状況 【4年目終了時】 ii <table><tr><th rowspan="2">No.</th><th>基準値</th><th colspan="4">実績</th><th colspan="2">見込み</th><th>目標値</th></tr><tr><td>第4期に研究能力ポートフォリオを新たに整備するものであるため、特定の時点の実績値はない。</td><td>R4 年度</td><td>R5 年度</td><td>R6 年度</td><td>R7 年度</td><td>R8 年度</td><td>R9 年度</td><td>運用開始～令和9年度の平均（令和6年度開始予定）</td></tr><tr><td>4-1-③</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>99.1</td><td>99.3</td><td>99.3</td><td>99.3</td><td>80％超</td></tr></table> ＜補足＞ - 各年度の数値は、各年度の2年次在学者の登録状況を記載している。	No.	基準値	実績				見込み		目標値	第4期に研究能力ポートフォリオを新たに整備するものであるため、特定の時点の実績値はない。	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	運用開始～令和9年度の平均（令和6年度開始予定）	4-1-③	-	-	-	99.1	99.3	99.3	99.3	80％超
No.	基準値		実績				見込み		目標値																		
	第4期に研究能力ポートフォリオを新たに整備するものであるため、特定の時点の実績値はない。	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	運用開始～令和9年度の平均（令和6年度開始予定）																			
4-1-③	-	-	-	99.1	99.3	99.3	99.3	80％超																			

- ・ R8～9 年度の見込みは、R6～7 年度の平均値とした。

2) 定性的な評価指標

・評価指標の達成状況 【4 年目終了時】 ii

No.	進捗等
4-1-①	<令和 4～7 年度の実績及び令和 8～9 年度の見込み> ・ 令和 5 年度に大学院博士前期課程のコースを再編し、大学院履修要項に教育課程表、学部科目と大学院博士前期課程科目の分野対応表、ナンバリングを記載して公開した。令和 8 年度以降も引き続き大学院履修要項に教育課程表、学部科目と大学院博士前期課程科目の分野対応表、ナンバリングを記載して公開する予定である。

・評価指標の達成状況 【4 年目終了時】 ii

No.	進捗等
4-1-②	<令和 4～7 年度の実績及び令和 8～9 年度の見込み> ・ 大学院博士前期課程における学会活動及び論文情報等の研究活動を可視化するため、令和 5 年度に研究能力ポートフォリオを整備し、大学院博士前期課程学生に入力させ、活用を促している。令和 8 年度以降も、引き続き研究能力ポートフォリオを運用し、大学院博士前期課程学生の活用を促す予定である。

中期目標	2 教育 【5】深い専門性の涵養や、異なる分野の研究者との協働等を通じて、研究者としての幅広い素養を身に付けさせるとともに、独立した研究者として自らの意思で研究を遂行できる能力を育成することで、アカデミアのみならず産業界等、社会の多様な方面で求められ、活躍できる人材を養成する。（博士課程）⑧
-------------	--

中期計画	中期計画の実施状況等				
【5-1】「イノベーション博士人材」育成のために、大学院博士後期課程の学生が在学中から産業界を意識しながら研究活動を実施することができるように、大学院博士後期課程カリキュラムの実施方法を改善する。 ○評価指標 【5-1-①】国内企業、国立研究開発法人、海外研究機関等における長期インターンシップや産業界との交流事業を実施し、その事後アンケート等において、対象の大学院博士後期課程学生に対する産業界等からの肯定的な評価結果が得られること	《中期計画の実施状況》 ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 1) 定性的な評価指標 ・評価指標の達成状況 <u>【4年目終了時】 ii</u> <table border="1" data-bbox="842 651 2112 1434"> <thead> <tr> <th data-bbox="842 651 1162 703">No.</th><th data-bbox="1162 651 2112 703">進捗等</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="842 703 1162 1434">5-1-①</td><td data-bbox="1162 703 2112 1434"> ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ - 大学院博士後期課程の授業科目「イノベーションチャレンジ」において、国内企業、国立研究開発法人、海外研究機関等に長期インターンシップを実施し、実施後に派遣先から提出される評定書において4段階評価中「良い」「どちらかというが良い」といった肯定的な評価が多く得られている。令和8年度以降も継続して実施する予定である。 - 大学院博士後期課程の学生と産業界の交流を促進し、異分野も含めた幅広く多様なキャリアパスの可能性の自覚や、民間企業等への就職の実現に資することを目的としたイベントである「ドクコン」を毎年実施し、令和8年3月末までに、延べ25社の企業および延べ116名の学生が参加した。令和5年度からは、参加企業によるプレゼンテーション評価に基づき、最高得点を獲得した発表学生に対してベストプレゼンテーション賞を授与している。さらに、令和6年度からは、参加企業とのフリートークをブース形式とするなど、大学院博士後期課程学生と産業界との双方向的な交流の充実を図っている。参加企業による学生のプレゼンテーション評価は、10点満 </td></tr> </tbody> </table>	No.	進捗等	5-1-①	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ - 大学院博士後期課程の授業科目「イノベーションチャレンジ」において、国内企業、国立研究開発法人、海外研究機関等に長期インターンシップを実施し、実施後に派遣先から提出される評定書において4段階評価中「良い」「どちらかというが良い」といった肯定的な評価が多く得られている。令和8年度以降も継続して実施する予定である。 - 大学院博士後期課程の学生と産業界の交流を促進し、異分野も含めた幅広く多様なキャリアパスの可能性の自覚や、民間企業等への就職の実現に資することを目的としたイベントである「ドクコン」を毎年実施し、令和8年3月末までに、延べ25社の企業および延べ116名の学生が参加した。令和5年度からは、参加企業によるプレゼンテーション評価に基づき、最高得点を獲得した発表学生に対してベストプレゼンテーション賞を授与している。さらに、令和6年度からは、参加企業とのフリートークをブース形式とするなど、大学院博士後期課程学生と産業界との双方向的な交流の充実を図っている。参加企業による学生のプレゼンテーション評価は、10点満
No.	進捗等				
5-1-①	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ - 大学院博士後期課程の授業科目「イノベーションチャレンジ」において、国内企業、国立研究開発法人、海外研究機関等に長期インターンシップを実施し、実施後に派遣先から提出される評定書において4段階評価中「良い」「どちらかというが良い」といった肯定的な評価が多く得られている。令和8年度以降も継続して実施する予定である。 - 大学院博士後期課程の学生と産業界の交流を促進し、異分野も含めた幅広く多様なキャリアパスの可能性の自覚や、民間企業等への就職の実現に資することを目的としたイベントである「ドクコン」を毎年実施し、令和8年3月末までに、延べ25社の企業および延べ116名の学生が参加した。令和5年度からは、参加企業によるプレゼンテーション評価に基づき、最高得点を獲得した発表学生に対してベストプレゼンテーション賞を授与している。さらに、令和6年度からは、参加企業とのフリートークをブース形式とするなど、大学院博士後期課程学生と産業界との双方向的な交流の充実を図っている。参加企業による学生のプレゼンテーション評価は、10点満				

		点中の平均が 7 点を超える水準であり、また、参加企業を対象としたアンケートにおいても、「非常に有益」「まあまあ有益」との評価が 9 割を超えている。令和 8 年度以降も継続して実施する予定である。

中期計画	中期計画の実施状況等																																																																				
【5-2】新たに令和5年度までに、世界トップレベルの教育実践を目的としたコンピュータ科学人材育成センター（仮称）を設立し、コンピュータ科学分野で高い研究開発能力を有し、産業界とアカデミアの双方で活躍できる能力を培うための取組を推進する。 ○評価指標 【5-2-①】令和5年度までのコンピュータ科学人材育成センター（仮称）設立 【5-2-②】海外や産業界等からの研究者招聘や国際ワークショップの開催を継続的に実施する 【5-2-③】センター所属教員の指導学生一人当たりの質の高い発表論文※²数を第3期中期目標期間終了時比10%増加させるとともに、センター所属教員のTOP10%論文率が10%以上であること ※² 「質の高い発表論文」:Elsevier 社が提供する文献データベース Scopus における Q1、Q2 レベルの論文を指している。	《中期計画の実施状況》 ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ ○ センター所属教員のコンピュータ科学分野における研究水準 - コンピュータ科学センターに所属する教員は質の高い論文を毎年発表しており、<u>所属教員が令和5年度に文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞する他、令和4年、令和5年及び令和7年にクラリベイトアナリティクス社による高被引用論文著者として選定される</u>など、国内外から非常に高い評価を受けている。 【評価指標の達成状況】 1) 定量的な評価指標 ・評価指標の達成状況 【4年目終了時】 iii <table><tr><th rowspan="2">No.</th><th>基準値</th><th colspan="4">実績</th><th colspan="2">見込み</th><th>目標値</th></tr><tr><td>第3期期間中にコンピュータ科学人材育成センター（仮称）が無かったため、平成28年から令和3年に修了したすべての博士後期課程学生一人当たりの質の高い発表論文の平均</td><td>R4 年度</td><td>R5 年度</td><td>R6 年度</td><td>R7 年度</td><td>R8 年度</td><td>R9 年度</td><td>令和4年から令和9年に修了したセンター所属教員の指導学生の一人当たりの質の高い発表論文が、令和4年から令和9年の6年間の平均</td></tr><tr><td rowspan="2">5-2-③</td><td>－</td><td>－</td><td>142</td><td>21</td><td>11</td><td>11</td><td>11</td><td>10%増加</td></tr><tr><td>1.65 報</td><td>－</td><td>4.00</td><td>2.00</td><td>1.83</td><td>1.83</td><td>1.83</td><td>1.82 報</td></tr></table> <table><tr><th rowspan="2">No.</th><th>基準値</th><th colspan="4">実績</th><th colspan="2">見込み</th><th>目標値</th></tr><tr><td>コンピュータ科学人材育成センター（仮称）はなく、新たに設立するものであるため、特定の時点の実績値はない。</td><td>R4 年度</td><td>R5 年度</td><td>R6 年度</td><td>R7 年度</td><td>R8 年度</td><td>R9 年度</td><td>令和4年から令和9年のセンター所属教員のTOP10%論文率の平均が令和4年から令和9年の6年間で平均して10%以上であること</td></tr><tr><td>5-2-③</td><td>－</td><td>－</td><td>66.7</td><td>72.6</td><td>73.1</td><td>73.1</td><td>73.1</td><td>10%以上</td></tr></table> ＜補足＞ - R8 及び R9 の見込みは、R5-R7 の平均とした。 - 第4期中期目標期間中の指導学生の一人当たりのQ1Q2 論文の平均は、1.83 報である。 - 第4期中期目標期間中の教員のTOP10%論文率の平均は73.1%であり、目標値の7.31 倍と大きく上回った。									No.	基準値	実績				見込み		目標値	第3期期間中にコンピュータ科学人材育成センター（仮称）が無かったため、平成28年から令和3年に修了したすべての博士後期課程学生一人当たりの質の高い発表論文の平均	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	令和4年から令和9年に修了したセンター所属教員の指導学生の一人当たりの質の高い発表論文が、令和4年から令和9年の6年間の平均	5-2-③	－	－	142	21	11	11	11	10%増加	1.65 報	－	4.00	2.00	1.83	1.83	1.83	1.82 報	No.	基準値	実績				見込み		目標値	コンピュータ科学人材育成センター（仮称）はなく、新たに設立するものであるため、特定の時点の実績値はない。	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	令和4年から令和9年のセンター所属教員のTOP10%論文率の平均が令和4年から令和9年の6年間で平均して10%以上であること	5-2-③	－	－	66.7	72.6	73.1	73.1	73.1	10%以上
No.	基準値	実績				見込み		目標値																																																													
	第3期期間中にコンピュータ科学人材育成センター（仮称）が無かったため、平成28年から令和3年に修了したすべての博士後期課程学生一人当たりの質の高い発表論文の平均	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	令和4年から令和9年に修了したセンター所属教員の指導学生の一人当たりの質の高い発表論文が、令和4年から令和9年の6年間の平均																																																													
5-2-③	－	－	142	21	11	11	11	10%増加																																																													
	1.65 報	－	4.00	2.00	1.83	1.83	1.83	1.82 報																																																													
No.	基準値	実績				見込み		目標値																																																													
	コンピュータ科学人材育成センター（仮称）はなく、新たに設立するものであるため、特定の時点の実績値はない。	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	令和4年から令和9年のセンター所属教員のTOP10%論文率の平均が令和4年から令和9年の6年間で平均して10%以上であること																																																													
5-2-③	－	－	66.7	72.6	73.1	73.1	73.1	10%以上																																																													

2) 定性的な評価指標

・評価指標の達成状況 【4年目終了時】 ii

No.	進捗等
5-2-①	<令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み> 世界トップレベルの教育実践を目的とした「コンピュータ科学人材育成センター（仮称）」の構想を踏まえ、コンピュータ科学分野における研究の推進、国内外の諸機関との連携、共同研究等の促進によるネットワークの構築、スマート社会を牽引する高度情報専門人材の育成を目的として、令和5年4月に「コンピュータ科学センター」を設置した。同センターにはコンピュータ科学分野の研究者4名を配置し、令和5年度から令和7年度までに、延べ6名の大学院博士後期課程学生が修了している。令和8年度以降も同センターを維持し、大学院博士後期課程学生を輩出していく。

・評価指標の達成状況 【4年目終了時】 ii

No.	進捗等
5-2-②	<令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み> 令和6年度に国際ワークショップ「ASPIRE×さがけコンピュータ科学センターワークショップ」を開催し、国内から11名、海外から6名の研究者を招聘した。参加者は、本学学生を中心に、約100人が参加した。また、令和7年度に国際ワークショップ「ASPIREワークショップ」を開催し、国内から3名、海外から7名の研究者を招聘した。参加者は、本学学生を中心に約60人が参加した。令和8年度以降も引き続き、国内外の第一線で活躍する研究者を招へいし、国際ワークショップでのコンピュータ科学分野の研究成果の共有、意見交換、学生指導を行う予定である。

中期目標	2 教育 【6】学生の海外派遣の拡大や、優秀な留学生の獲得と卒業・修了後のネットワーク化、海外の大学と連携した国際的な教育プログラムの提供等により、異なる価値観に触れ、国際感覚を持った人材を養成する。⑫
------	---

中期計画	中期計画の実施状況等
【6-1】異なる価値観に触れ、国際感覚を持った人材を養成するために、海外協定校等と協働した教育プログラムの展開など学生の海外派遣を充実させる。優秀な留学生の獲得と卒業・修了後のネットワーク化のために、海外在住 OB を活用した海外同窓会体制を新たに整備する ○評価指標 【6-1-①】日本人学生派遣数を第3期中期目標期間終了時比1.2倍とする 【6-1-②】海外同窓会体制として2拠点を整備する	《中期計画の実施状況》 ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ ○国際感覚を持った人材養成のための海外協定校等と共同した教育プログラムの展開 - 海外協定校と連携した国際共同研修プログラムを教育課程の一環として体系的に実施し、教員の関与と単位認定を伴う国際教育を推進してきた。同プログラムでは、専門分野研修、現地学生との交流、異文化理解教育等を組み合わせた国際的視野の涵養を図る研修内容を整備している。また、募集・選考、危機管理、奨学金支給、単位認定等を国際交流センターが一元的に管理する運営体制を確立している。第4期中期目標期間中には、マレーシア、インドネシア、台湾等の6大学（協定校）で新たに国際交流プログラムを実施し、研修地域及び学術分野の広がりが生まれ、学生が多様な国際環境で学修する機会の拡充につながった。今後も、海外協定校との連携を基盤に、国際共同研修プログラムの継続的な実施と内容の充実を図る。 ○学生の海外派遣の充実 - JASSO による定義に基づく長期留学・短期研修を基本とし、協定校研修、国際会議参加、学生主体の国際活動など、多様な海外派遣機会を整備してきた。説明会・個別相談・Web 発信を継続し、本学独自の奨学金および外部資金を活用した経済的支援を組み合わせることで参加促進を図った。その結果、第4期中期目標期間中の海外派遣者数は累計220名に達し、令和6年度75名、令和7年度72名となり、目標値を2年連続で上回った。また、大学独自奨学金により、短期研修、国際共同研修プログラム、MGS（ムロラン・グローバル・ステージ・チャレンジ）奨学生など累計198名を支援し、経済的障壁を軽減した。今後も、継続的な情報発信と奨学金支援を維持し、学生の参加促進を図る。 ○海外在住 OB を活用した海外同窓会体制の新たな整備 - 中国とマレーシア・インドネシアの3カ国において、海外在住 OB を中心に同窓グループを形成し、現地での会

合等を通じて学生交流や留学支援を行うネットワークを整備して正式に同窓会を立ち上げた。これにより、令和4年度時点で0拠点であったものが、令和6年度には3拠点へと拡大した。これにより、海外同窓会体制として機能する基盤が形成され、協定校における現地支援体制を補完する役割を果たしている。今後も、既存ネットワークの維持および活動の活性化を図る。

【評価指標の達成状況】

1) 定量的な評価指標

・評価指標の達成状況 【4年目終了時】 ii

No.	基準値	実績				見込み		目標値
	H28～H30 年度 (コロナ禍前3年間) 平均	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	第4期中期目標期間中の いずれかの年度に1度達成
6-1-①	-	0.3	1.1	1.5	1.4	1.2	1.2	1.2倍
	51名	16	57	75	72	61	61	61名

<補足>

- ・ R8 及び R9 年度の見込みは、目標値と同値とした。

・評価指標の達成状況 【4年目終了時】 iii

No.	基準値	実績				見込み		目標値
	海外の同窓会組織はなく、 新たに整備するものであるため、 特定の時点の実績値はない。	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	第4期中期目標期間 終了時の累計
6-1-②	0 拠点	0	1	3	3	3	3	2 拠点

<補足>

- ・ R8 及び R9 年度の見込みは、令和7年度の実績値と同値とした。

中期目標	2 教育 【7】様々なバックグラウンドを有する人材との交流により学生の視野や思考を広げるため、性別や国籍、年齢や障害の有無等の観点から学生の多様性を高めるとともに、学生が安心して学べる環境を提供する。⑬
------	---

中期計画	中期計画の実施状況等																												
【7-1】多様な学生を受け入れて学生に自身の視野や思考を広げる教育環境を提供するため、女子学生や社会人学生、留学生、障害者を受け入れる環境および交流させる環境を整備する。 ○評価指標 【7-1-①】学生意向の把握と学生意向を踏まえた計画的な環境の整備 【7-1-②】様々なバックグラウンドを有する人材との交流を促す講演会等を1回/年以上開催する	《中期計画の実施状況》 ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 【評価指標の達成状況】 1) 定量的な評価指標 ・評価指標の達成状況 <u>【4年目終了時】 ii</u> <table><tr><th rowspan="2">No.</th><th>基準値</th><th colspan="4">実績</th><th colspan="2">見込み</th><th>目標値</th></tr><tr><th>第3期平均</th><th>R4年度</th><th>R5年度</th><th>R6年度</th><th>R7年度</th><th>R8年度</th><th>R9年度</th><th>第4期中期目標 期間中の平均</th></tr><tr><td>7-1-②</td><td>1回</td><td>3回</td><td>3回</td><td>3回</td><td>3回</td><td>3回</td><td>3回</td><td>1回以上</td></tr></table> ＜補足＞ ・教職員向けセミナー「教職員のためのダイバーシティセミナー」を年1回実施するとともに、学生向けセミナー「キャリア形成のためのランチタイムセミナー」を年2回実施した。令和8年度以降もこれらの取組を継続して実施する予定である。 2) 定性的な評価指標 ・評価指標の達成状況 <u>【4年目終了時】 ii</u> <table><tr><th>No.</th><th>進捗等</th></tr></table>	No.	基準値	実績				見込み		目標値	第3期平均	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	第4期中期目標 期間中の平均	7-1-②	1回	3回	3回	3回	3回	3回	3回	1回以上	No.	進捗等
No.	基準値		実績				見込み		目標値																				
	第3期平均	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	第4期中期目標 期間中の平均																					
7-1-②	1回	3回	3回	3回	3回	3回	3回	1回以上																					
No.	進捗等																												

	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="831 151 1162 687"> 7-1-① </td><td data-bbox="1162 151 2163 687"> ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 学生の意向を把握する取り組みの一つとして、毎年、新入生アンケートを実施する他、令和6年度に学部2～4年生を対象として在学生アンケート(3年毎実施)を実施した。新入生アンケートや在学生アンケートでは、学生食堂の暑さ対策について意見があり、改善に向け、令和8年度にエアコンを設置することを決定した。このほか、お祈りの習慣がある留学生に対してアンケートを実施し、回答があった一部の留学生にヒアリングを行い、礼拝室の設置候補場所を利便性の高い校舎内に決定し、令和6年度から運用を開始した。今後は、令和8年度に礼拝室に対するアンケート、新入生アンケートを実施し、令和9年度には在学生アンケートを実施予定であり、その結果を検証し必要に応じて改善する。 </td></tr> </table>	7-1-①	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 学生の意向を把握する取り組みの一つとして、毎年、新入生アンケートを実施する他、令和6年度に学部2～4年生を対象として在学生アンケート(3年毎実施)を実施した。新入生アンケートや在学生アンケートでは、学生食堂の暑さ対策について意見があり、改善に向け、令和8年度にエアコンを設置することを決定した。このほか、お祈りの習慣がある留学生に対してアンケートを実施し、回答があった一部の留学生にヒアリングを行い、礼拝室の設置候補場所を利便性の高い校舎内に決定し、令和6年度から運用を開始した。今後は、令和8年度に礼拝室に対するアンケート、新入生アンケートを実施し、令和9年度には在学生アンケートを実施予定であり、その結果を検証し必要に応じて改善する。
7-1-①	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 学生の意向を把握する取り組みの一つとして、毎年、新入生アンケートを実施する他、令和6年度に学部2～4年生を対象として在学生アンケート(3年毎実施)を実施した。新入生アンケートや在学生アンケートでは、学生食堂の暑さ対策について意見があり、改善に向け、令和8年度にエアコンを設置することを決定した。このほか、お祈りの習慣がある留学生に対してアンケートを実施し、回答があった一部の留学生にヒアリングを行い、礼拝室の設置候補場所を利便性の高い校舎内に決定し、令和6年度から運用を開始した。今後は、令和8年度に礼拝室に対するアンケート、新入生アンケートを実施し、令和9年度には在学生アンケートを実施予定であり、その結果を検証し必要に応じて改善する。		

中期計画	中期計画の実施状況等								
【7-2】性別や国籍、年齢、障害の有無等が異なる多様な学生を含め、全ての学生が勉学に専念できる環境を整えるために、大学生活支援、学習支援、就職活動支援等を Web の活用により可視化（学生支援 Web マップ）し、様々な支援の利便性を向上させる。 ○評価指標 【7-2-①】大学生活支援、学習支援、就職活動支援等の Web マップを令和6年度までに実装する 【7-2-②】Web マップに関する各種アンケートの実施及びアンケート結果に基づく Web マップの継続的な改善	《中期計画の実施状況》 ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 1) 定性的な評価指標 ・評価指標の達成状況 <u>【4年目終了時】 ii</u> <table> <tr> <th>No.</th><th>進捗等</th></tr> <tr> <td>7-2-①</td><td> ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ - トピックス、大学生活支援、学習支援、就職活動支援等をまとめた学生支援 Web マップ（学生ポータルサイト）を構築し、令和6年度から運用を開始した。令和8年度以降も学生支援 Web マップ（学生ポータルサイト）を維持し、大学生活支援、学習支援、就職活動支援等を可視化する。 </td></tr> </table> ・評価指標の達成状況 <u>【4年目終了時】 ii</u> <table> <tr> <th>No.</th><th>進捗等</th></tr> <tr> <td>7-2-②</td><td> ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ - 令和6年度に学生支援 Web マップ（学生ポータルサイト）の利用に関するアンケートを実施した結果、スマートフォン表示非対応による使いづらさが明らかになったため、改善を行い、利便性を向上させた。令和8年度以降も学生支援 Web マップ（学生ポータルサイト）利用に関するアンケートを実施し、必要に応じて改善を行う予定である。 </td></tr> </table>	No.	進捗等	7-2-①	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ トピックス、大学生活支援、学習支援、就職活動支援等をまとめた学生支援 Web マップ（学生ポータルサイト）を構築し、令和6年度から運用を開始した。令和8年度以降も学生支援 Web マップ（学生ポータルサイト）を維持し、大学生活支援、学習支援、就職活動支援等を可視化する。	No.	進捗等	7-2-②	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 令和6年度に学生支援 Web マップ（学生ポータルサイト）の利用に関するアンケートを実施した結果、スマートフォン表示非対応による使いづらさが明らかになったため、改善を行い、利便性を向上させた。令和8年度以降も学生支援 Web マップ（学生ポータルサイト）利用に関するアンケートを実施し、必要に応じて改善を行う予定である。
No.	進捗等								
7-2-①	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ トピックス、大学生活支援、学習支援、就職活動支援等をまとめた学生支援 Web マップ（学生ポータルサイト）を構築し、令和6年度から運用を開始した。令和8年度以降も学生支援 Web マップ（学生ポータルサイト）を維持し、大学生活支援、学習支援、就職活動支援等を可視化する。								
No.	進捗等								
7-2-②	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ 令和6年度に学生支援 Web マップ（学生ポータルサイト）の利用に関するアンケートを実施した結果、スマートフォン表示非対応による使いづらさが明らかになったため、改善を行い、利便性を向上させた。令和8年度以降も学生支援 Web マップ（学生ポータルサイト）利用に関するアンケートを実施し、必要に応じて改善を行う予定である。								

中期目標	3 研究 【8】真理の探究、基本原理の解明や新たな発見を目指した基礎研究と個々の研究者の内在的動機に基づいて行われる学術研究の卓越性と多様性を強化する。併せて、時代の変化に依らず、継承・発展すべき学問分野に対して必要な資源を確保する。⑭
-------------	--

中期計画	中期計画の実施状況等																																		
【8-1】従来型の学問分野を基礎とする教員研究組織ユニットについて、研究計画と構成員の研究業績の評価によって各ユニットの業績等を明らかにし、その評価結果を次年度に配分する研究費に反映させ、各ユニットの基盤研究を充実させる。 ○評価指標 【8-1-①】教員研究組織の評価と評価結果に基づく研究費の配分を継続的に実施する 【8-1-②】教員一人当たり査読付き論文数の増加傾向	《中期計画の実施状況》																																		
	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞																																		
	【評価指標の達成状況】																																		
	1) 定量的な評価指標																																		
	・評価指標の達成状況																																		
	【4年目終了時】 ii																																		
	<table><tr><td rowspan="2">No.</td><td>基準値</td><td colspan="4">実績</td><td colspan="2">見込み</td><td>目標値</td></tr><tr><td>第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)</td><td>R4年度</td><td>R5年度</td><td>R6年度</td><td>R7年度</td><td>R8年度</td><td>R9年度</td><td>増加傾向</td></tr><tr><td>8-1-②</td><td>1.83 報</td><td>2.16</td><td>2.27</td><td>2.25</td><td>2.36</td><td>2.26</td><td>2.26</td><td>1.84 報</td></tr></table>									No.	基準値	実績				見込み		目標値	第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	増加傾向	8-1-②	1.83 報	2.16	2.27	2.25	2.36	2.26	2.26	1.84 報
	No.	基準値	実績				見込み		目標値																										
		第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	増加傾向																										
	8-1-②	1.83 報	2.16	2.27	2.25	2.36	2.26	2.26	1.84 報																										
＜補足＞																																			
- R8 及び R9 の見込は、R4-R7 の平均とした。 - 第4期中期目標期間中の教員一人当たり査読付き論文数の平均は2.26 報であり、目標値である1.84 報に対して1.23 倍を達成した。																																			
2) 定性的な評価指標																																			
・評価指標の達成状況																																			
【4年目終了時】 ii																																			
<table><tr><td>No.</td><td colspan="8">進捗等</td></tr></table>									No.	進捗等																									
No.	進捗等																																		

	8-1-①	<令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み> 令和4年度に研究組織「ユニット」の評価方法を検討し、研究計画と研究業績に対して評価することで、研究費の配分を行うこととした。また、業績評価対象となる論文をScopusに収録されているものを原則としたほか、特許出願の追加、公募型外部資金の対象拡大を行い、より多くの研究業績を対象にした評価制度に改善した。また、令和4年度～令和6年度は、前年度の業績評価及び執行部によるヒアリングの採点（計画評価）に基づき、各ユニットに予算配分を行い、令和7年度は、前年度の業績評価に基づき予算配分を行った。令和8年度以降も、業績評価に基づく研究費の配分を継続的に行う予定である。
--	-------	---

中期計画	中期計画の実施状況等																																																				
【8-2】基礎研究と個々の研究者の内在的動機に基づいて行われる学術研究の卓越性と多様性を強化するために、教員の国際的な活動を支援する制度を充実させるなどして、国際共同研究を強化する。 ○評価指標 【8-2-①】国際共著論文数の増加傾向 【8-2-②】国際共著論文の FWCI(Field Weighted Citation Impact)値 1.0 以上を維持する	《中期計画の実施状況》 ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ ○ 教員の国際的な活動を支援する制度の充実 - 令和6年度に、「若手研究者国際会議発表支援」「国際共同研究プロジェクト申請支援」「プレ国際共同研究支援」制度を構築し、3件、110万円の支援を行った。また、令和7年度には、「若手研究者海外派遣事業」への応募者を募るため、派遣研究者を講師に説明会を実施した。<u>これらをはじめとした教員の国際的な活動を支援する制度を充実させたことにより、第4期中期目標期間中の国際共著論文の FWCI の平均は 1.47 となり、目標値の 1.47 倍を達成している。</u> 【評価指標の達成状況】 1) 定量的な評価指標 ・評価指標の達成状況 <u>【4年目終了時】 ii</u> <table><tr><th rowspan="2">No.</th><th>基準値</th><th colspan="4">実績</th><th colspan="2">見込み</th><th>目標値</th></tr><tr><th>第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)</th><th>R4年度</th><th>R5年度</th><th>R6年度</th><th>R7年度</th><th>R8年度</th><th>R9年度</th><th>増加傾向</th></tr><tr><td>8-2-①</td><td>0.5報</td><td>0.65</td><td>0.88</td><td>0.71</td><td>0.52</td><td>0.69</td><td>0.69</td><td>0.51報</td></tr></table> ＜補足＞ - R8及びR9の見込は、R4-R7の平均とした。 ・評価指標の達成状況 <u>【4年目終了時】 iii</u> <table><tr><th rowspan="2">No.</th><th>基準値</th><th colspan="4">実績</th><th colspan="2">見込み</th><th>目標値</th></tr><tr><th>第3期終了時の 世界水準</th><th>R4年度</th><th>R5年度</th><th>R6年度</th><th>R7年度</th><th>R8年度</th><th>R9年度</th><th>第4期中期目標 期間中の平均</th></tr><tr><td>8-2-②</td><td>1以上</td><td>1.45</td><td>1.50</td><td>1.59</td><td>1.47</td><td>1.47</td><td>1.47</td><td>1以上</td></tr></table>	No.	基準値	実績				見込み		目標値	第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	増加傾向	8-2-①	0.5報	0.65	0.88	0.71	0.52	0.69	0.69	0.51報	No.	基準値	実績				見込み		目標値	第3期終了時の 世界水準	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	第4期中期目標 期間中の平均	8-2-②	1以上	1.45	1.50	1.59	1.47	1.47	1.47	1以上
No.	基準値		実績				見込み		目標値																																												
	第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	増加傾向																																													
8-2-①	0.5報	0.65	0.88	0.71	0.52	0.69	0.69	0.51報																																													
No.	基準値	実績				見込み		目標値																																													
	第3期終了時の 世界水準	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	第4期中期目標 期間中の平均																																													
8-2-②	1以上	1.45	1.50	1.59	1.47	1.47	1.47	1以上																																													

	<補足> ・ R8 及び R9 の見込は、R4-R7 の平均とした。 ・ 第 4 期中期目標期間中の平均は 1.47 であり、目標値の 1.47 倍に上昇した。
--	---

中期目標	3 研究 【9】地域から地球規模に至る社会課題を解決し、より良い社会の実現に寄与するため、研究により得られた科学的理論や基礎的知見の現実社会での実践に向けた研究開発を進め、社会変革につながるイノベーションの創出を目指す。⑮
-------------	---

中期計画	中期計画の実施状況等																																		
【9-1】「北海道 MONO づくりビジョン 2060」で掲げた①「産業」の価値、②「地域」・「生活」の価値等を向上させる持続可能で豊かな社会を実現するための科学技術開発を推進するクリエイティブコラボレーションセンターを充実させる。 ○評価指標 【9-1-①】クリエイティブコラボレーションセンターの教員一人あたりの査読付き論文数と外部資金獲得額に基づく総合指標値※³（本学提案）の増加傾向 ※³「総合指標値」：本学のイノベーションステージを技術成熟度レベル2「Research to Prove Feasibility」からレベル4「Technology Development」と想定し、その達成度は総合的な研究活動（査読付き論文数、外部資金獲得額（受託・共同 研究費等））を対象として評価することとした。総合指標は、本学の定量的総合評価による教員評価システムの実績を活かし、前述の研究活動毎に重み係数 を定めている。	《中期計画の実施状況》 ＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞ ○ 科学技術開発の推進とクリエイティブコラボレーションセンターの充実 令和7年度から新たに、クリエイティブコラボレーションセンターと MONO づくりみらい共創機構が連携して、地域の課題解決に取り組む「プレタスクフォース」を募集し、15 件（本格型:5 件、育成型 10 件）を採択した。また、既存プロジェクトのうち、事業化が見込める「北海道マテリオームラボ」及び「ライフサイエンスラボ」の2 件を新ラボとして採択した。また、<u>経済産業省「地域オープンイノベーション拠点選抜制度（J イノベ）」</u>へ申請し、<u>クリエイティブコラボレーションセンターが拠点として選抜された</u>（選抜認定期間は令和7年度～令和9年度までの3年間。）。令和8年度以降も新たな「プレタスクフォース」の募集、「タスクフォース」「新ラボ」への昇格などサポートを続け、さらには新たな「拠点」へと発展させるために、地域土着型プロジェクトを推進する。																																		
	【評価指標の達成状況】 1）定量的な評価指標 ・評価指標の達成状況 【4年目終了時】 iii																																		
	<table><tr><th rowspan="2">No.</th><th>基準値</th><th colspan="4">実績</th><th colspan="2">見込み</th><th>目標値</th></tr><tr><th>第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)</th><th>R4 年度</th><th>R5 年度</th><th>R6 年度</th><th>R7 年度</th><th>R8 年度</th><th>R9 年度</th><th>増加傾向</th></tr><tr><td>9-1-①</td><td>21.6</td><td>29.5</td><td>32.8</td><td>31.1</td><td>32.3</td><td>31.4</td><td>31.4</td><td>21.7</td></tr></table>									No.	基準値	実績				見込み		目標値	第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	増加傾向	9-1-①	21.6	29.5	32.8	31.1	32.3	31.4	31.4	21.7
	No.	基準値	実績				見込み		目標値																										
第3期終了時 (第3期最終年度の実績値)		R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	増加傾向																											
9-1-①	21.6	29.5	32.8	31.1	32.3	31.4	31.4	21.7																											

	<補足> ・ R8 及び R9 の見込は、R4-R7 の平均とした。 ・ 令和 4 年度以降、毎年度、目標値の 1.3 倍 (28.2) を超える実績となっている。 ・ 総合指標値の算出方法及び各年度の教員一人当たりの論文数及び外部資金額は別添資料 p. 4 を参照。
--	---

中期目標	4 その他社会との共創、教育、研究に関する重要事項 【10】国内外の大学や研究所、産業界等との組織的な連携や個々の大学の枠を越えた共同利用・共同研究、教育関係共同利用等を推進することにより、自らが有する教育研究インフラの高度化や、単独の大学では有し得ない人的・物的資源の共有・融合による機能の強化・拡張を図る。⑬
------	--

中期計画	中期計画の実施状況等				
【10- 1】日本の宇宙・航空機の学術研究コミュニティの中核として機能し、高度な宇宙・航空機人材の育成を推進することにより、基盤技術の研究開発（超音速有翼機研究）の継続に加え、日本の大学で本学のみが有する白老実験施設（Linear Hyper—G 環境実験施設、航空宇宙機エンジン実験施設、飛行試験設備）を共同利用した日本国内大学や産業界との受託・共同研究を推進する。 ○評価指標 【10- 1 -①】航空宇宙機システム研究センターの日本国内大学、企業との受託・共同研究数を年間 1.75 件/人以上とする	《中期計画の実施状況》 ＜令和 4 ～ 7 年度の実績及び令和 8 ～ 9 年度の見込み＞ ○ 日本の宇宙・航空機の学術研究コミュニティの中核としての機能 - 国内の多数の大学や企業との共同研究が進められており、宇宙・航空機の学術コミュニティをリードする役割を果たしている。今後の成長が期待されている数々の宇宙輸送系のベンチャーとも連携が深化している。また、<u>宇宙戦略基金の事業として令和 6 年度の「宇宙戦略基金によるロケット射場基盤技術」、令和 7 年度の「デトネーションエンジンの研究開発」と「有人宇宙輸送システムにおける安全確保」の計 3 件に分担者として参画</u>している。 ○ 基盤技術の研究開発（超音速有翼機研究）の継続 - 令和 7 年度に、<u>デルタ翼固定翼機の離陸から着陸まで完全自動飛行に国内大学で初めて成功</u>するとともに、エアターボラムジェットエンジンの改修を進め、当該研究を精力的に継続している。 ○ 白老実験施設を共同利用した日本国内大学や産業界との受託・共同研究の推進 - 白老実験場は萌芽的フィールド研究の拠点としてプレゼンスが高まっており、年間を通じて、<u>全国の大学・企業との共同研究が行われている。受託研究・共同研究数は、令和 4 年度 26 件、令和 5 年度 21 件、令和 6 年度 22 件、令和 7 年度 26 件と推移</u>している。				
	【評価指標の達成状況】 1）定量的な評価指標				
	・評価指標の達成状況				
	【4 年目終了時】 iii				
	No.	基準値	実績	見込み	目標値

		第 3 期終了時 (日本の航空宇宙系の水準)	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	第 4 期中期目標 期間の平均
	10-1-①	1.75 件/人	8.67	7.84	7.67	7.92	7.92	7.92	1.75 件/人以上
	<補足> ・ R8 及び R9 の見込は、R4-R7 の平均とした。 ・ 第 4 期中期目標期間中の平均は 7.92 件/人であり、目標値の 4.5 倍と大きく上回った。								

中期計画	中期計画の実施状況等																																									
【10-2】第3期中期目標期間において、国際拠点化を推進した希土類材料研究センターの実績を地域への貢献に活かすために、世界的な希土類の共同研究体制を強化する。 ○評価指標 【10-2-①】希土類材料研究センターの国際共著論文比率及び教員一人あたりの論文数を第3期中期目標期間終了時比10%増加させる 【10-2-②】学生海外派遣数を第3期中期目標期間終了時比10%増加させる	《中期計画の実施状況》																																									
	＜令和4～7年度の実績及び令和8～9年度の見込み＞																																									
	○ 世界的な希土類の共同研究体制の強化																																									
	・ 令和4～7年度の実績として、共同研究契約を締結しているエイムズ研究所、テネシー大学及びチェンマイ大学を中心とした国際共同研究を行った。さらに、国際ネットワークの拡大を目指し、韓国 Korea National Institute of Rare Metals (KORAM) と研究学術交流協定(MOU)を新規に締結した。国際共同研究を行うため、これまでに9名の大学院生を共同研究機関に派遣した。令和8年度以降は、共同研究契約を締結している研究機関との国際共同研究を積極的に推進し、国際共著論文比率の目標値達成を見込んでいる。また、新たにMOUを締結した韓国の研究機関に学生を派遣する機会が見込めることから、学生への渡航支援を実施して学生海外派遣数を増加させる予定である。																																									
	【評価指標の達成状況】																																									
1) 定量的な評価指標																																										
・評価指標の達成状況																																										
【4年目終了時】 ii																																										
<table><tr><th rowspan="2">No.</th><th>基準値</th><th colspan="4">実績</th><th colspan="2">見込み</th><th>目標値</th></tr><tr><th>第3期終了時 (第3期の平均値)</th><th>R4年度</th><th>R5年度</th><th>R6年度</th><th>R7年度</th><th>R8年度</th><th>R9年度</th><th>第4期中期目標 期間の平均</th></tr><tr><td rowspan="2">10-2-①</td><td>－</td><td>37</td><td>29</td><td>14</td><td>14</td><td>14</td><td>14</td><td>10%増加</td></tr><tr><td>34.8%</td><td>47.8</td><td>45.0</td><td>39.6</td><td>39.7</td><td>39.7</td><td>39.7</td><td>38.3%</td></tr></table>									No.	基準値	実績				見込み		目標値	第3期終了時 (第3期の平均値)	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	第4期中期目標 期間の平均	10-2-①	－	37	29	14	14	14	14	10%増加	34.8%	47.8	45.0	39.6	39.7	39.7	39.7	38.3%
No.	基準値	実績				見込み		目標値																																		
	第3期終了時 (第3期の平均値)	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	第4期中期目標 期間の平均																																		
10-2-①	－	37	29	14	14	14	14	10%増加																																		
	34.8%	47.8	45.0	39.6	39.7	39.7	39.7	38.3%																																		
<table><tr><th rowspan="2">No.</th><th>基準値</th><th colspan="4">実績</th><th colspan="2">見込み</th><th>目標値</th></tr><tr><th>第3期終了時 (第3期の平均値)</th><th>R4年度</th><th>R5年度</th><th>R6年度</th><th>R7年度</th><th>R8年度</th><th>R9年度</th><th>第4期中期目標 期間の平均</th></tr><tr><td rowspan="2">10-2-①</td><td>－</td><td>70</td><td>47</td><td>30</td><td>25</td><td>25</td><td>25</td><td>10%増加</td></tr><tr><td>1.51編/人</td><td>2.56</td><td>2.22</td><td>1.96</td><td>1.89</td><td>1.89</td><td>1.89</td><td>1.66編/人</td></tr></table>									No.	基準値	実績				見込み		目標値	第3期終了時 (第3期の平均値)	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	第4期中期目標 期間の平均	10-2-①	－	70	47	30	25	25	25	10%増加	1.51編/人	2.56	2.22	1.96	1.89	1.89	1.89	1.66編/人
No.	基準値	実績				見込み		目標値																																		
	第3期終了時 (第3期の平均値)	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	第4期中期目標 期間の平均																																		
10-2-①	－	70	47	30	25	25	25	10%増加																																		
	1.51編/人	2.56	2.22	1.96	1.89	1.89	1.89	1.66編/人																																		

<補足>

- ・ R8 及び R9 の見込は、R4-R7 の平均とした。
- ・ 国際共著論文比率について、第 4 期中期目標期間中の平均は 39.7%であり、目標値の 38.3%を上回った。
- ・ 教員一人当たりの論文数について、第 4 期中期目標期間中の平均は 1.89 編/人であり、目標値の 1.66 編/人を上回った。

・評価指標の達成状況 【4年目終了時】 ii

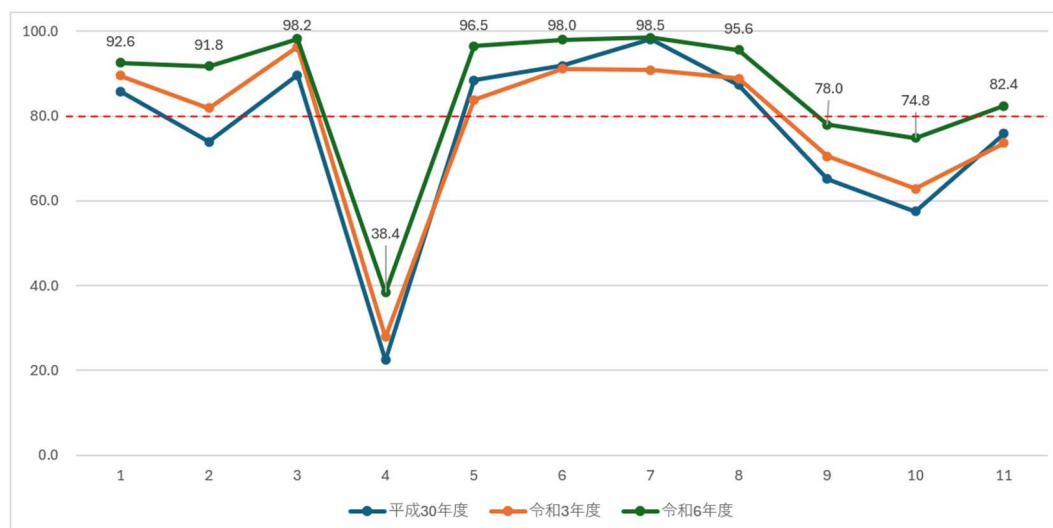
No.	基準値	実績				見込み		目標値
	第 3 期終了時 (累計)	R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	第 4 期中期目標期間 終了時の累計
10-2-②	-	0	0	0	0	0	13	10%増加
	15名	0	2	5	9	13	17	17名

<補足>

- ・ R8 及び R9 の見込は、それぞれ、チェンマイ大学（タイ）2 名、KORAM（韓国）2 名への派遣を予定している。
- ・ 第 4 期中期目標期間終了時の累計見込は 17 名であり、目標値の 17 名を達成する見込である。

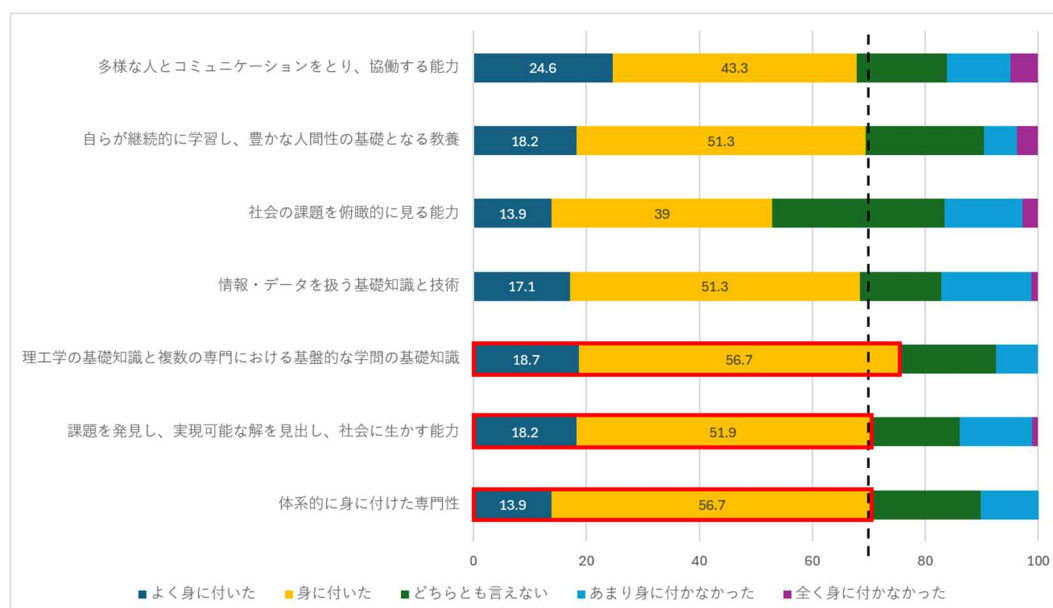
中期計画 2-1（中期目標の達成状況報告書 p. 8）関係

- 令和 6 年度に実施した企業アンケート結果（回収率 30.1%）のうち、本学卒業者の意識や身に付けている能力に関する設問の回答状況は、以下の図のとおりとなっている。



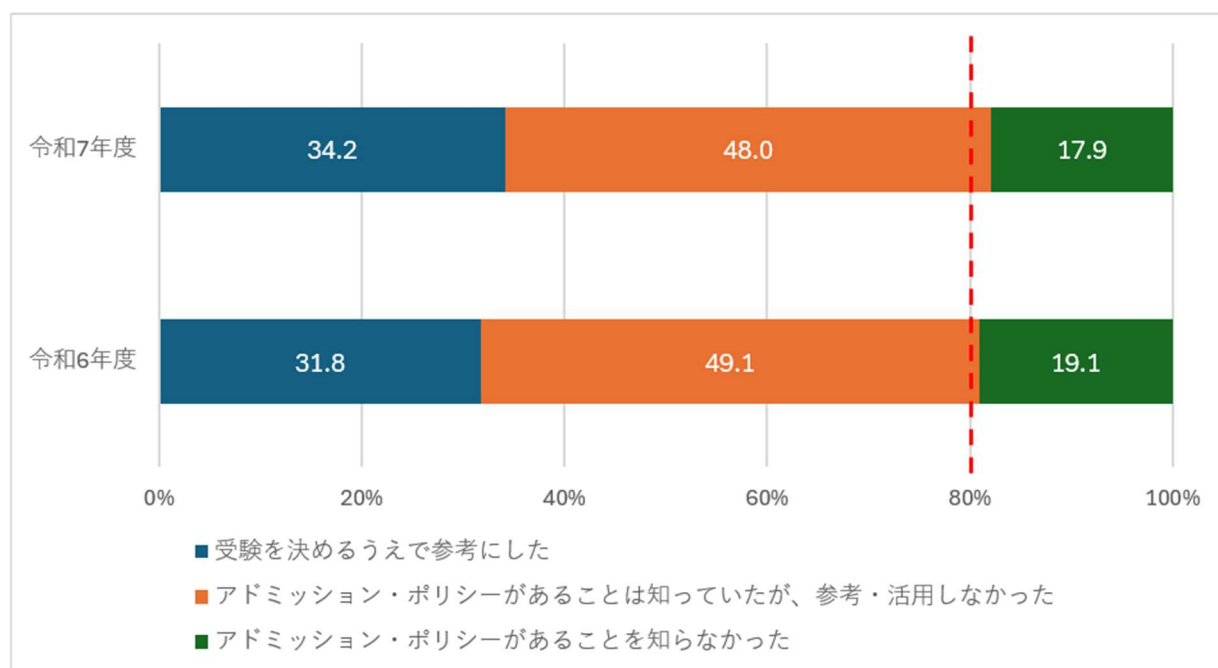
1. 科学技術に強い関心を持った卒業者が多い	7. 仕事上の課題等に責任感、倫理観をもって積極的に取り組む行動力を持った卒業者が多い
2. 幅広い教養を身に付けている卒業者が多い	8. 問題解決にあたり、調査、分析、報告の能力が高い卒業者が多い
3. 基礎科学及び工学に関する専門知識を身に付けている卒業者が多い	9. IT（情報技術）の知識やスキルを身につけた卒業者が多い
4. 国際感覚を身につけた卒業者が多い	10. 専門分野だけでなく社会全般の情勢や問題に対する興味・関心を持っている卒業者が多い
5. 論理的な思考の展開ができ、それを他者への確に伝えることができる卒業者が多い	11. 職場でリーダーシップを発揮したり、部下指導などに優れた卒業者が多い
6. 社会的常識を持ち、健全な人間関係を築くことができる卒業者が多い	

- 令和 6 年度に実施した卒業生アンケート結果（回収率 8.8%）のうち、在学時に身に付けた事項に関する設問の回答状況は、以下の図のとおりとなっている。



中期計画 2-2（中期目標の達成状況報告書 p. 10）関係

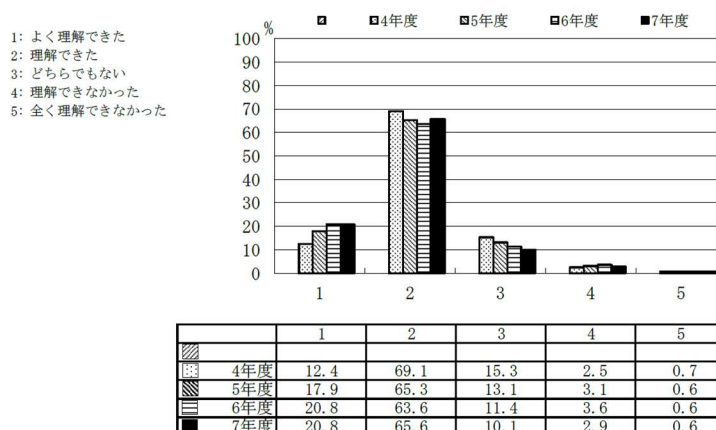
- 令和 6 年度に実施した新入生アンケート（回収率 40.3%）における、本学アドミッション・ポリシーの認知度に関する設問の回答状況は、下図（下段）の棒グラフのとおりである。なお、新入生アンケートは毎年度実施しており、令和 7 年度（回収率 30.6%）においても、アドミッション・ポリシーの認知度は引き続き高い傾向を維持している。



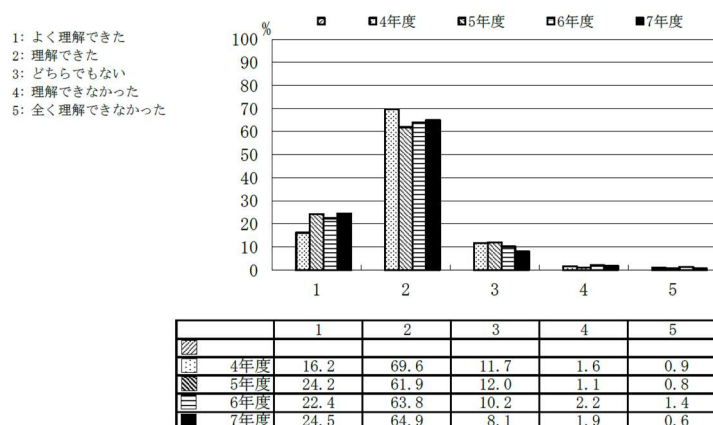
中期計画 3-2（中期目標の達成状況報告書 p. 14）関係

- 令和 7 年度に実施した卒業予定者アンケート結果（回収率 54.4%）のうち、理工学部共通教育、学科共通教育及びコース専門教育における学生の理解度に関する設問の回答状況は、以下の図のとおりとなっている。

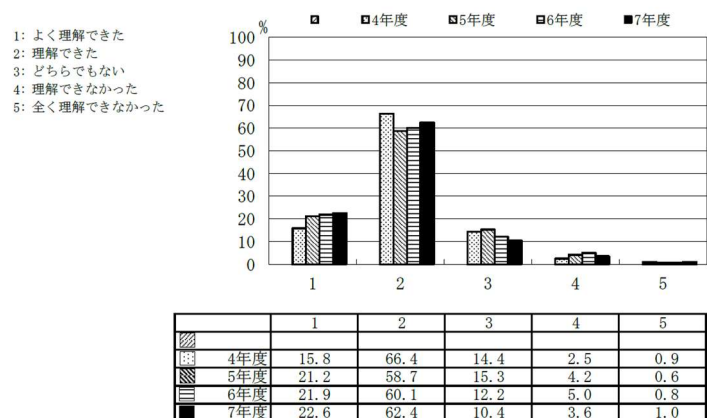
C-1. 理工学部共通科目（数学、物理、化学等）の講義科目



C-2. 学科共通科目（各学科の基盤となる基礎的科目）の講義科目



C-3. コース科目（各コースの専門科目）の講義科目



中期計画 9-1（中期目標の達成状況報告書 p. 33）関係

- 評価指標 9-1-①「クリエイティブコラボレーションセンターの教員一人あたりの査読付き論文数と外部資金獲得額に基づく総合指標値（本学提案）の増加傾向」において、評価指標として設定した総合指標値は、同センター所属教員の「教員一人当たりの論文数[編] p 」及び「教員一人当たり外部資金額[万円] f 」を基礎とし、以下の式により算出している。

$$\text{総合指標値} = \sqrt{(6p)^2 + (0.03f)^2}$$

※上記式の係数は、本学が平成 18 年度に導入した教員の多面的評価システム（ASTA）においてこれまで蓄積してきた本学教員の教育、研究、社会・国際貢献、部局・大学運営における業績データの分析に基づいて設定したものであり、本指標値は、本学教員の研究活動を総合的に評価する指標となっている。

- なお、同センターにおける「教員一人当たりの論文数」及び「教員一人当たり外部資金額」は、以下の表のとおりとなっている。

	論文数[編]	外部資金[万円]	総合指標値
第3期最終年度	3. 375	249. 7	21. 6
令和4年度	4. 476	410. 6	29. 5
令和5年度	4. 951	464. 8	32. 8
令和6年度	4. 622	469. 9	31. 1
令和7年度	5. 000	402. 3	32. 3